

第53回 ミコアイサ

カモちゃん かほくがたチルドレン

ヒロ



オスの羽衣が巫女の白装束のように見えるのでミコ（巫女）アイサ（秋沙）、白地に目の回りが黒く縁取られるので、バンダガモと呼ばれる人気者です。河北潟では、少数が冬鳥として飛来します。あまりまとまっては見られませんが、ほぼいつでも見つけることができます。冬の観察会では、このカモを見つけてスコープで見ってもらうのがお決まりのパターンです。水面にゆっくりと浮かんでいることが多いので、観察はしやすい水鳥ですが、時々潜水をするので、順番によっては見えなかったという人もいます。

カモ類はほとんどそうですが、このカモは特にオスだけが注目されますが、メスも茶色の頭部の色が目立ち、とてもかわいらしい鳥です。マガモと比べると一回り小さく、カモ類の群れの中にも比較的に見つけやすい鳥です。嘴も特徴的で、主に魚を食べるカモ類なので、捕まえた魚を逃がさないようにくちばしの先は鉤状に曲がり、縁には鋸状のギザギザがあります。岸から離れて湖面の中程にいることが多いので、実際はくちばしの詳細までは、なかなか観察できません。

「アイサ」は、カモ科アイサ族のカモに使われている名称で、他に、カワアイサ、ウミアイサ、コウライアイサが日本に冬鳥としてやってきます。この3種は、アイサ属に属していますが、ミコアイサはホオジロガモ属に分類されます。「アイサ」の語源は秋沙といわれており、秋が過ぎたところにやって来るカモの意ということです。ミコアイサと同じく、くちばしにノコギリ状の刻みがあります。いずれも潜って魚を捕らえますが、魚を逃

がさないためにギザギザのくちばしになっていると考えられています。河北潟ではミコアイサの他、カワアイサがよく見られます。カワアイサは大型のカモで、オスの頭の部分が緑色、メスは茶色をしており、雌雄ともくちばしが赤いのが特徴で、たいへん識別しやすい鳥です。

羽田（1986）によると、ミコアイサやカワアイサなどのもっぱら魚を捕って食べるカモ類は、富栄養湖に多いということです。河北潟は富栄養湖ですが、これらの種はそれほど目立ちません。西日本の湖沼のデータに基づいての結論ですが、河北潟では水面で植物質を採食するマガモやヒドリガモなどが圧倒的に多いので、他の湖沼とは異なる特殊な条件があるのかも知れません。カモ類ではありませんが、採魚性の水鳥であるカンムリカイツブリは、河北潟で繁殖する個体が増えているようです。これより小型のカイツブリは留鳥として以前から多く生息しています。同じ採魚性の鳥でも、夏に河北潟を利用する鳥と冬に利用する鳥では、採餌条件が大きく異なっているのかも知れません。（文：高橋 久）